

---

# ある幸福な二人の話

黴菌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある幸福な一人の話

### 【NZコード】

N6176A

### 【作者名】

黴菌

### 【あらすじ】

ある一人の高校生の男は自殺をしようとしていた。その前に現れたのは男に幸福を届けに来たという少女、「幸福の支配人」だった。そんな二人の切ない恋の話。

## プロローグ（前書き）

三つ目の作品です。

前の作品の反省も兼ねて作成しました。  
少し自信作です。

気に入った方はコメントしていただけると大変嬉しいです。

それではどうぞゆっくり（ 、 、 ）

## プロローグ

あの日僕は君に会った

今まで見た事のない様な不思議な人。

感じた事のない感情。

……君の最後の涙は僕を恐ろしい程哀しくさせた。

1年前だ。

あの日僕は自殺しようとしていた。



## 第1話・屋上

失恋だ……。

最悪だ……。

僕の初めての恋……。

愛しいあの人を取ったのは誰?

誰だ……。

もう……どうでもいい……。

人生なんかくだらない。

恋愛感情など…くだらない…。

死のう…。

今死ねば…極楽だ…

幸福だ…。

「何やつてるの??」

透き通る美しい少女の声。

振り向く。

やはり少女。

真っ白な肌に見慣れない制服。

「死ぬ… 楽になる…。」

僕は既に生氣を失っていた。

生きる希望を……。

「死ぬつてそこから飛び降りるって事??」

少女が屋上の下を指す。

「当たり前だ…。」

それ以外何があるんだ…。

「ふうん。変な事するんだね？？痛いでしょ？」

「なんでこの少女は…いつも冷静なんだ…。」

「！」の高さなり…即死だから…一瞬じゃないか…。」

「違う。そんな痛みじゃないよ。」

そう言つて少女は自分の胸を呑んで。

「心の痛み。」

違ひ…

苦しいから死ぬんだ。

今の僕なら死ぬのが苦しいワケない。

「違ひ…。死ねば…楽になるんだよ。」

「えつしつなのー?じゃ私も死ぬー!」

そう言つて少女は…柵を乗り越え、僕の隣りに来て微笑む。

「何[冗談]言つて…」

そう言つた時少女は既に空中の一歩踏み出した。

「…何するの？？」

少女は僕に掴まれた自分の腕を見ながら言った。

僕は無意識に彼女を助けていた。

「いや……なんか…。」

「怖いんでしょ？？死を間近にするのが怖いんでしょ？？」

少女は僕の目を見て言った。

「私だつて怖いもん。だからあなたは死んじゃ駄目ーー。」

少女にはさつきまで存在しなかつた必死さがあった。

「はーー。」

僕はそれに素直に応じた。

多分……心の奥でその言葉を一番待つてたんだと想つ……。

「じゃバイバイ。」

そう言って柵を乗り越えて帰らうとした。

「待つて！－」

僕は気付くと少女をとめていた。

「何？」

少女が首を傾げる。

「名前は……？」

「望月彩子……君は高沢涼介じょ？」

「は？ なんで……名前知ってるんだよ……。」

「なあ……なんで名前……。」

少女はいなかつた。

「あれ？」

不審に思い、屋上の隅々をさがした。  
でも少女はいない。

僕は気にかかる少女を頭の隅に置き、今日帰るはずのなかつた家に  
帰つた。

そつ……望月彩子と言ひたの少女がいなければ帰る事のできなかつた  
家に……。

## 第2話・幸福の支配人

僕が住むマンションの前まで来た。

僕の親は早く死んで、僕は一人で暮らしている。

親の遺産が結構あったため、暮らしにはあまり困っていない。

僕の部屋がある7階までエレベーターで上った。

エレベーター特有の感覚を感じながら7階についた。

僕の部屋はこの一番奥だ。

少しいつもと違つて気付く。

僕の部屋の前に誰かがしゃがんでる。

僕は急ぎ足でその人に近づく。

あの少女だった。

今度は白いワンピースを着ている。

そこだけが別の空間なような…そんな感じだった。

僕に気付くと少女は顔を上げた。

そしてまた「ゴッ」と笑う。

「何やつてんの？？」

僕が少女の前まで来て言った。

「あなたに幸福を届けるため。」

少女はキッパリと笑顔で言った。

幸福？？

この人…おかしい。

「今私の事変人だと思ったでしょ？？説明するから中入っていい？」

「いや……変人とまでは……え？中に入るの？」

僕が少し大きな声で「う」と少女は僕の口を手で塞ぎ人指し指を立てる。

「シー！近所迷惑でしょ？？それとも何？見られちゃヤバい物でも部屋にあるのかしら？」

少女がからかうようにニタニタと笑う。

「ふえつひひやひもひやい……（別に何もない……）」

僕が口を少女に塞がれたまま言つと少女は高い声で大爆笑した。

そっちのが……近所迷惑……。

「中入るだ。」

少女の手を口から外し、ドアに鍵を差し込み開けた。

少女は遠慮なしと書いた感じで部屋にズカズカと入っていった。

僕が座る場所を指定しなくても適当にテーブルの前に足を崩して座っていた。

僕がお茶を出そうとした所で準備していると少女はハツとしたような感じで言った。

「あつお茶とかはいいから……」うちの食べ物口にしたらちよつと面倒な事になるし。」

「うちの食べ物??

とつあえず僕はお茶つ葉を元の場所に置き、少女の前に座る。

少女の顔を初めてまともに見た。

少女とは言つても僕と同じ位の年齢のやつだった。

真っ黒な瞳が僕を見つめる。

絶え切れず僕は彼女から目を離した。

「照れちゃつてえ（笑）」

少女がまた二タ二タと意地悪に笑う。

「でなんなんだよーー！」

僕は少しムキになつて聞いた。

「だからあら」とつても不幸な高沢涼18歳に幸福を届けに来たの  
！－それが私の仕事だから！わかつた？」

そう言つて少女が僕を指差す。

「わかんない。だいたい『こっちの世界』って言つてたけど何でこ  
う意味だよ？？」

「私はこっちの世界の住人じゃないって事。こっちの世界の人達に  
こんな職業ないでしょ？？」

「こっちの世界の住人じゃない？」

「「」こんな職業つ…て？？」

気になる所がありすぎる…。

「だから幸福を届ける仕事！」の職業に就いてる人はみんな特別な力を持つてて、それを指定された不幸な人のために使ってあげるの。」

力…？？

おじぎ話じゃあるまいし…。

「例えば？」

「うへん…。それは実戦しなきや説明できいや……だから…君が不幸な理由を教えて？」

不幸な理由…？？

そんな物ありすざる…。

「いろいろ…何を言えばいいか…。」

「大丈夫！一回だけつてワケじゃないから。君が人並に幸せになれたらおしまいだから。」

人並みに…か。

なるほどな…。

僕に人並みの幸せが味わえるのだろうか…。

「…好きな人にフラれた…。同じクラスの柿村菜由って人…。」

そう言つと少女の顔が少しだけ歪んだような気がした…。

「おっけえ！その人の気持ち…君に向ければいいんだね！…明日学校行ったら上手くいってるから。」

彼女の気持ちが…僕に…？

まさか…そんな…ハッタリかもしれないし……。

「力使うと疲れちゃうから私寝るね。おやすみ…。」

そつ言つて少女はソファに横になる。

「待て待て…まさか…ここに腰座る気じゃないだろ？」「…

既に横になつた少女に言つ。

「当たり前じやない。幸福を届けるかわりみたいな感じかな？？」

眠やうな声で少女が言った。

「あ……私の事は……ララって呼んで……。それが私の仕事上の名前だから……。」

「ララ……。」

仕事上の名前……？

なんでもわざわざやる……。

そう思つて聞いたりと思つたが、少女が寝息をたて始めたので布団を掛けてしまった。

明日…か。

そういうのの中で呟いて僕はベットで眠った。

### 第3話・初恋の人

目覚めると暗かった部屋は太陽の日差しによつて明るくなつていた。

「おはようござこます。」

声のした方を見ると、ララがエプロンを着て朝ご飯を作っていた。

「何やつてんの?」

僕が寝ぼけた声で聞くと、ララは笑うのをたえていた。

「見てわかりませんか??ご主人様の朝ご飯を作っているのです。」

てゆづか……なんで敬語？

「何いきなりかしこまつてんだよ…。」主人様つて…メイド喫茶じやないんだから…。」

「私達幸福の支配人には偉い方がいらっしゃいます。その方に『あまりフレンドリーに接するものではない。』と注意されまして…。」

幸福の支配人…？

そんな職名あつたんだ…。

「いや…でもなんか喋りづらいつていうか…。」

なんて言つていいかわからんない…。

「とまあえずタメ口でいいから。涼つて呼んでいいし。」

「……うんー。わかった。今ルナ様にも許していただいたし。」

ルナ様？

「ルナ様って偉い人？？でか今どうやつて話つけたんだよ…。」

「ルナ様はすべて見てるし、交信みたいな事もできるから。はい朝  
ご飯できたよ。」

そう言つてララが料理をテーブルに置いた。

目玉焼きに白い飯に味噌汁。

なんでこんな定番メニューーーしてんだろう？？

「…」

僕はテーブルのイスに腰掛けながら聞いた。

「当たり前でしょ。私だって……あ……涼……学校大丈夫??」

そう言つてララが時計を指差す。

8時……。

学校が始まるのは8時半……。

学校までは急いで20分……。

「ヤバッ!!」

僕はそう言つて田の前にあつた朝ご飯を口に挿き込んだ。

「おお早いね（笑）」

ララが笑いながら言った。

だが急ぐ僕にはあまり耳に入らない。

僕は制服に着替え玄関に走った。

「いってらっしゃい。」

僕の動作はそこで止まる。

「…どうしたの？」

ララが後ろから心配そうに聞く。

「いや……なんでもない！ いつできますーーー！」

そつと僕は出て行った。

「いつでいらっしゃって言われたのは何年ぶりだろ？　……」

エレベーターで一番下まで降りる。

そして走って歩道にである。

ああと……

やじたせ……

僕の初恋の人……。

柿村菜由…。

「あ…おはよー…やつと来た（笑）早くいかなきゃ遅れるよ…？」

彼女は昨日僕をフツたにも関わらず…いつも以上な接し方…。

「どうしたの…？早く行こよ。」

彼女は僕の顔を笑顔で覗きこんできた。

「あつうん、『メン』ー」

僕は赤くなつた顔をかくすよつて歩きだした。

「待つてよう（汗）涼早いつてえ。」

甘えた声で彼女が後ろから言つたので僕は足を止めた。

「なあ……なんで今日一緒にこよつと思つたの？？」

僕は彼女の方を見て言つた。

「う～ん。なんか今日は一緒に来たかったの。あ…昨日の事なしにして？？」

昨日の事？

僕が告白した事??

「それってどういっ。」

「私勘違いしてたみたい。涼の事好きだったのに…。昨日の告白…もう一回してもらつていい??」

僕がもつとも望んだ言葉を…恥ずかしそうに彼女が言った。

愛しいと思つた。

「好きだ…。付き合つてくれる??」

昨日言つた台詞を今もう一度…。

「嬉しき……いこよ。愛してゐるよ……涼……。」

そう言つて彼女は僕の胸に飛び込んでくる。

夢かと思つた。

彼女の体温を感じて夢ではない事を知つた。

## 第4話・謎

その後、菜由は学校に行かずニートをしようとせがんで来たが…出席日数が足りなくなるとマズいので僕がなんとか説得した。

一番気になるのはラーラだ…。

まさか本当にこんな事になると思つてなかつた。

正直…幸福の支配人とか…信じてなかつたし…。

あ…結局なんでこいつらの世界の料理作れたんだつけ??

急いでたからあんまり味わってなかつたけど、面かつたし…。

「だいたい…説明が不十分なんだよな…。」

屋上で空に向かって呟く。

さつきまで菜由も一緒にいたが委員会の仕事があつたため、名残おしそうに去つていった。

だから屋上には誰もいない。

「何が不十分?/?」

少しだけ驚いて振り向く…やつぱり…見知らぬ制服を着たララがいた。

「なんでもんな制服着てんだよ。」

「ワカを指差しながら言った。

「決まってるじゃなー。  
不審に思われなーよつこ。」

いやいや……その制服でも不法侵入になるだろ。

「それいいの制服じやなこー。」

しかもよく見ると十四。

「えっ？ だって……あ……なんでもない……。」

「えつ…。あつ幸福の支配人ってね長生きあるの…少しでも長く

僕はその重い空気こたえられず話題を変えよつとした。

「あつララつて何歳?/?」

「えつと…身体的には涼と回りへりこだよ。」

身体的とは…?

「じつこつ意味?/?」

ララがちやんと答えてくれる氣はしなかつたが聞いてみた。

仕事ができるようにな。でも身体的にはあまり変化はないの。だから最初から年取った感じの肉体してる人もいるし、最初から私みたいに若い肉体をしてる人もいるの。」

若い肉体…ねえ。

そりゃ若いけど…。

自分でいうなよ。

「なつ何よその日は…!…ピッヂピチなんだからね!見せてあげる!..」

そういうてララはリボンをとり、シャツのボタンを外そうとする。

「阿呆か!…やめろ!..」

僕は少し焦って止めにかかりた。

「いつまでも近づいていたいとは思ひでないと言つた感じで、ニヤリと笑つた。

「何本氣になつてんの？？顔が赤いぞエロ坊主（笑）。

かなり至近距離でララが僕を見ていう。

「いいまで近づいてララの背の低さが強調された。

「バツ違つて！…そりゃ誰でも焦るだろー！…！」

「じょうがないか。思春期だもんね（笑）。

そういうとララは僕から離れていく。

「何処行くんだよ？？」

僕がそう言つとリラは振り向き一コロと笑つ。

「帰る。もうすぐで彼女もくるみたいだし。邪魔でしょ？？バイバイ。

それだけ言つとリラは向き直つてドアの暗闇に消えた。

彼女とは……菜由の事だろ？

一人で帰つて大丈夫だろ？

あれでも結構な美人だし……。

「つょ～フーー。」

菜由の声がドアの向こうから階段を駆け登る音と共に聞こえた。

それでリカを心配する気持ちは何処かに行ってしまった。

第5話・悲劇

僕と菜由は今日初めて一緒に帰った。

いろいろな話をして笑つた。

僕の思い描いた状態だつた。

「あつね漁<sup>い</sup>の指輪買<sup>う</sup>おつよーーー。」

そういうて菜由は僕の腕に絡み付いて小さなアクセサリー屋を指差す。

はしゃぐ姿もまた可愛かつた。

「わかつたわかつた。」

そうして店内に入つていいく。

「どうれがいいかなあ～？？」

菜由が腕を絡ませたまま指輪を眺める。

本当に微笑ましい光景。

「いやー……助けてー……！」

店のすぐ外から女の悲鳴が聞こえた。

「何？」

そう呟く菜由を置いて僕は走った。

あれは  
。

透き通るような少女の声…。

カラの畠。

店の隣りの路地裏。

ララはいた。

3人の若い男と一緒に。

ララはその内の2人に抑えられていた。

もう一人はララの頬に手を置いている。

「キヤー……いやあ……」

ララが必死に叫ぶ。

「あんまり叫ぶなよ。可愛い顔が台無しだぜ。すぐに気持ち良くな  
つからよ。」

ララの頬を触る男がいう。

「止めるー。」

僕は無意識に叫んだ。

男が舌打ちをする。

「涼ー！？ダメっ！…！…！」ひしひしひダメー！」

ララがそう叫んだ。

しかしララにそういう余裕はないはず。

壁に抑えられていたララが床に張り付けられる。

さつ毛類を触っていた男がララにまたがる。

僕はララの元へ走ろうとした。

「涼！？その女の方が大事なの？？」

店から出てきた菜由が言った。

僕は止まってしまいます。

菜由の嫉妬深さは少し有名だつた。

それも僕は可愛いとさえ思つていた。

でも今嫉妬されても困る。

さすがにここまでとは思ってなかつた。

「大事とか言つ問題じやないだろ！…今あの子が危ないんだぞ！」

そう叫んで走りうとしたが菜由が後ろから抱き締めて止めた。

「嫌だ…。行かせない。涼は私のだもん。私が一番涼を愛してる  
だもん…。」

僕は動けなかつた。

振りほどひうと思えばできる程の力だつたのに…。

僕は動かなかつた。

ただ…ララが遊ばれるのを見る事しかできなかつた。

ララは首を舐められ白のワンピースの中に手を入れられ、ぐぢゅぐぢゅにされた。

その度にララは苦しそうに泣きながら喘いだ。

僕も…苦しかったのに……。

ララは唇の中に男の舌を入れられていた。

男の方が一方的に…。

その途中で何人かの男が僕の後ろからララの元へ走っていく。

そうしてララを苛めた男達は取押えられた。

「どうやら誰かが警察を呼んだようだった。」

リカは女性の警察に立たされ、ほとんど放心状態で泣いていた。

そんなリカの耳元で取押えられた男が囁く。

「また苛めさせてね。」

僕は菜由を振りほどいてその男を殴った。

しかし警察に止められる。

菜由は絶望の表情で見つめる。

ララは放心状態。

僕は最低な人間だ。

あの時死んでいた方が良かつたのかもしない。

「ゴメン……」「ゴメン……」

僕はララの前で泣き崩れた。

ララは放心状態でそれを見下ろしていた。

## 第6話・過去の痛み

ララはしばらく病院で保護される事になった。

今でも自分が情けない。

僕は守れなかつた……。

ララは僕を助けてくれたのに……。

僕は次の日学校に行かなかつた。

菜由と会つのも気まずかったし、何より：1人になりたかった。

そして僕は自分を叱る。

静かに…ヒッソリと。

「つよ……つ。」

後ろから小さな声が聞こえた。

相手はわかっている。

「病院…どうしたんだよ…。」

背を向けたままララにいつ。

「大丈夫だから家に帰るって言ったの…。」

沈黙が流れた。

僕がその沈黙を破る。

「出でつてくれ。」

俯いたまま僕は言った。

「え……？」

「もう十分だから……もう……帰つてくれ。これが僕の望む事だから。」

十分……1%も満たされていない僕が言つのは不思議だった。

「嘘つたら……。」

背中に温もりを感じた。

ララがピッタリと僕の背中にしつこつとしつこつとしつこつだった。

それでも僕は体制を変えない。

「涼……じゃあ……どうして泣ってるの？？」

僕は……言われてやつと気が付いた。

自分が涙を流している事に……。

自分が逃げ場を探している事に……。

「私…大丈夫だよ。確かに…怖かった…。助けて欲しかった。でも涼の幸せを考えると…涼に助けは求められなかつた。私は…幸福の支配人は…自分のために力は使えない。」

なんて…綺麗な人なんだろう。

「私は…良かつたと思う…。怖くても…涼が不幸せになる事程、恐ろしくはなかつた。私は…涼の幸せが幸せ。」

どうして僕は…

「だから泣かないで…さあ…あなたの求める事を言つて??」

守ってやれなかつたんだろ？

僕は振り返つてララを抱き締めた。

ララは抵抗する事なく受け入れた。

ララが…愛しい。

「好きだ…。ララ。」

僕は言った。

そして抱き締める腕に力を入れる。

ララは何も言わず、僕の背中に手を置いた。

ララの肩は…心なしか震えていた。

そして…泣いているように思えた。

「ハリ…？」

「あなたに…秘密にしていた事があるの……。」

「それは…今まで曖昧な考え方だったし…。」

「なんだ??」

「前…身体的には若いくつで言う話したでしょ?なんで支配人に最初の身体年齢が決まってるかわかる??」

「そこ…」

僕はララを抱いたまま首を横に振った。

「その身体年齢はね……その人が死んだ時の年齢の体なんだ。」

え…?

じやあララ。

「ララ……君は……」

「15年前に…死んだわ。」

僕はその言葉が信じられなかつた。

「『死』とこつ言葉は程遠く思えたから。

「なんで…？」

「重い病氣だつた。そのおかげでほとんどの病院で過りしたの。苦し  
そうな人もたくさん見たわ。患者さんだけじゃない…お医者さんの  
方も…苦しもうだった。」

僕の声はだんだん震えていく。

「私は…幸せにしたかった。だから…私が死んだ時…私は行くべき場所にいがす、この仕事に就いた…の。」

ララの手に力が入るのがわかつた。

「私の初めての仕事は病院の…あるお医者さんを幸せにすることだった…。」

ララの軽い体重のほとんど僕にかかる。

「その人は…とても優しかった。こんな人が不幸だなんて…残酷だなって思った。」

「 そうだね…。」

僕は絶え切れず小さく相槌をうつた。

「 なかなか…願い事を言わないから…私は願い事を聞いた…。」

「 その人は…なんて？？」

ララの震える肩を抑えながら言った。

「『僕を殺して欲しい。』彼はそう言つた。

「私は…彼が好きだつた。だから必死に断つたわ。でも…結局…彼は死しか望まなかつた。」

「なぜそこまで？」

しばらく沈黙が続いた。

「ララが重い口をゆっくりと開く。

「あの人は……私の担当医だった人なの……。」

ララの声はもう消えていきそうだった。

「彼は……私の大切な手術をした……。手術は失敗……。助かる可能性  
は……十分あつた……。」

「彼は……何か？？」

また少し沈黙が流れる。

「彼……その前の日に……随分お酒を飲んでたらしいの……。」

ララの震えは更に大きくなつた。

「私の容態がいきなり悪くなつたからいけなかつたの……。緊急手術で……その時は……彼ぐらいしか……手術できる人がいなかつたから……。彼が私の担当医だつたし……。」

ララは涙声になつていいく。

「私が…私が悪かったの…。彼は何もしらずにお酒を飲んでしまつただけ…。彼は何も悪くなかった…。」

「でもね…」

「今」の声がせりて暗くなる。

「でも…私は…彼が憎くなつた…。」

「憎く…なつた??」

僕はつい聞き返した。

ララは…彼女は…人を憎むような人じゃない…。

あらゆる物を愛する綺麗な少女だ。

「そう…。今は…どうして憎かつたんだろうって思う。…あの時…  
私は助からない手術だつたんだ…死んだのは仕方なかつたんだつて、  
思つてたから…。」

「でも…彼がお酒さえ飲んでなければ…私は助かつてた。今もきっと生きていたはず。おばさんになつて、愛する夫と子供と一緒に…幸せに生きていたかもしない…。」

カラの気持ちは苦しい程に直接僕の心に響いた。

「私に未来はあつたの…！彼が…私の幸せを…未来を奪つたの…。だから私は彼を憎んだ。大好きだつた彼を憎んだ。」

カラは生きる事に羨しさをかんじていた…。

「彼はとても反省していた…。だから…私に…殺せと…。私に…仕返しをしろと…彼は言った。」

ララは涙を押し殺しながら僕の一 番聞きたくない言葉を言った。

「私は彼を殺した。」

ララが人を殺した。

汚れのない少女が…人を殺した。

「苦しめず…殺してあげた。一瞬で…彼は倒れて…息を止めたわ。」

僕は…何も喋れなかつた。

何も言えなかつた。

言葉が…思いつかない…。

ララへの言葉が…思いつかない…。

「自分のした事に気付いた時には遅かった。声をあげて泣いた…。  
私は…自分が怖くなつた。彼の願いだつたけど…全部自分の願いで  
…彼を殺した。」

ララは大声で泣いた。

「私は醜い……私は汚い……私は最悪……自分を……呪い殺してやりたい……。

」

泣きながらリラは聞き取りづらいうで嘆いた。

そこに居たのはリラではなくて……

幸せを求める望月彩子という一人の少女だった。

## 第7話・最後の願い

田を開いた。

部屋はいつのまにか真っ暗だった。

「うわあ……どうなったんだろ。」

泣きやんだんだっけ??

覚えてない…。

上半身を起し、暗闇に目を凝す。

何かおかしい…。

こつもと違つ氣がする…。

段々視界が広がっていく…。

「ラガいない…。

僕は確かめようと急いで電気をつけた。

ララはどこにもいなかつた。

テーブルの上に一枚の手紙が行儀よく置いてあつた。

僕はその手紙を手にとる。

『私はあなたのお望み通り、ここを出て行きます。あなたもあんな話を聞いたら私と一緒にいたくないでしょ?だから内緒にしてた。あなたとできるだけ一緒にいたかったから…。いきなりでごめんなさい。あなたに力を使って寝かせたの。涼と居た時間は一、二日くらいで短かつたけど…楽しかったよ。さようなら。』

その手紙には涙が滲んでいた。

僕の涙ではない…

ララの綺麗な涙。

僕は家を飛び出した。

ララの手紙を無意識に握つたまま…。

ララの行く場所に心当たりはなかった。

とりあえず、僕の知る限りの場所を探した。

だが…どこにもララはいなかつた。

だいたい… じつはこの世界にまだ居るかどうかも感じたのだ。

そう考えた後、僕はまだ探していない場所を思い付いた。

ララがいる証拠はなかつたが…なぜか…絶対にそこにはララがいると思った。

僕は明るくなりかけた空の下で学校の門を飛び越える。

ドアの鍵はあいていた。

薄暗く不気味な階段を駆け登る。

そして最上階まできて、荒れた呼吸を整える。

セントエマリスと壁上へのドアのノブを回した。

案の定、鍵はかかっていなかった。

ドアを開く…セントエマリスがいた。

あの制服を着ていた。

リラが気配に気付いて僕の方を振り向く。

リラは…泣いていた。

「うう…こ…へ…？」

ララが信じられないといつ顔で言った。

「君なり…望月彩子なりココに来ると思って。」

「…彼女なり…ココにあただろ。」

「君は…この学校の生徒だつたんだろ？？」

よく見ると望月彩子の制服の胸あたりには…この学校の校章がつけられていた。

「入学式くらいしか来なかつたから…生徒とはここにびらこねえ。」

「制服が変わつてしまつた事を知らず、君はこの学校にその制服で來ていたんだろう?」

望月彩子は何も言わずに首を縦に振つた。

そしてまた僕に背を向ける。

「もつ…お別れね…。涼が私を見つけた」褒美に、最後の願いを聞いてあげる。「

望円彩子は仕事上の

「ララ」

になつて僕に言つた。

できるだけ明るい声で言つているのがわかつた。

「ずっと…ここに来て欲しい…。」

僕は少女を後ろから抱き締めた。

「それは…できない…。それは私の望む事だもの。涼の両親を…合  
わせてあげる事はできる…。」

震えていた…。

ララの肩は震えていた。

「…………。」

僕は黙った。

確かに……よく顔も覚えていない両親には会いたかった。

でも……リリ……里見彩子にも……ずっと側に居て欲しかった。

「『ゴメン』……時間ないから……呼んであげる。」

僕はそれに口出しをしなかつた。

結局どうでも良かったのだ。

すると少し強い風が吹いた。

懐かしい…心地のいい風…。

「涼…。」

後ろから優しい女性の声がした。

ララから離れ、僕は振り返る。

「どうが懐かしい…男女がそこに居た。

男は照れくしゃみに頭を搔き、女な女神のよつな微笑みをこじりて、元気でいた。

「幽也さん…父さん…。」

「でかくなつたな。」

男がやつと一言やつとつた。

僕は走り出した。

両親のもとへ。

母さんは腕を広げて歓迎した。

父さんは、僕の後ろにいた少女を見ていた。

「母さん…。」

母さんの胸に顔を埋めて泣いた。

「あらあら、もつ高校生でしょ。男の子なんだか…泣かないの。」

小さな子をあやすよくな口調だった。

母さんは僕が1歳の時に交通事故で死んだ。

甘えられる時間があまりに短かったのだ。

父さんは…その2年後、自殺をした。

しかし自殺といつても外傷はなく、薬を飲んだわけでもなく、謎の死に方だった。眠っているみたいで僕は父さんが死んでいるとは…信じていなかった。

父さんを横田で見ると、僕の視界にはいなかった。

「」の大きな泣き声が後ろから聞こえた。

そして何度も  
「『めんなさい』  
と謝罪の言葉をくりかえしていく。

わかつてた。

リカの話を聞いてから、僕は父さんの謎の死を自殺だと判断した。

父さんは医者だった。

腕のいい医者だった事はよく覚えている。

そんな父さんが血漫だつたから。

誇らしかつたから、僕は友達にも、近所の人にも血漫した。

そんな父さんは……ある日を境に、様子がおかしくなつた。

明るくて面白かった父さんだから……その日の事はよく覚えてい  
る。

父さんは仕事から帰ってくるときなりテーブルに伏せた。

いつものだっこがなかつたので、僕は父さんのもとくよつた。

父さんは泣いていた。

僕は3歳ながら父の泣く所を見てじうよつした。

それから父さんはあまり多くを語らなくなつた。

その半年後、父さんは死んだ。

「い」みんなで……つ私……私……」

「今まだ泣きながら父さんに謝っていた。

「もういいんだ。私が望んだんだよ……。苦しい事をさせてすまなか  
つたね。私は……君に感謝しているよ。そもそも僕が謝るといひだ。」

僕は母さんに抱き付いたまま口を開じる。

「違う……私は……あなたを恨んで……ほとんど……私が望んで……許せな

「へ…。」

「ララ…殺してくれてありがとう。」

父さんはそう言った。

僕はまた15年前を思い出す。

「パパ?」

僕は泣いていた父さんを心配して話かけた。

「お腹いたいの？？お薬欲しい？」

そう僕が言つと父さんは顔をあげて微笑んだ。

「パパ…人を助けられなかつたんだよ。パパはちつとも凄くはない  
んだよ、涼。」

「パパはショカイーかつこいいんらもん！！」

舌足らずな口調で僕は言った。

「涙の中では……おひと飛びでこなせてくれ。」

雪へよひて父をさせまつっていた。

## 第8話・行くべき場所へ

それから何分たつただろう。

「ワサナモツ既に泣きやんでいた。

僕は母さんから離れた。

もつ離れなくてはならないと思つた。

別れがある事に気付いた。

あの日も…母さんが死んだ時も…別れがあった。

父さんが死んだ時も…。

でも僕は今…別れを知っている。

それなりの覚悟つてものはついている。

「涼…元氣でね…。」

母さんが笑顔で僕に言った。

「元気にして最後まで精一杯生きるのよ。」

「母さん…。」

僕の覚悟はあっけなく崩れて、目の前が滲んだ。

「…幸せになるんだぞ。涼。」

父セミが母さんの隣に来て言った。

「 もう…十分…幸せ…だよ。」

生まれた時から…父セミと母さんの子に生まれて…短い間だった  
けど…育てられて…そして…また命えて…。

「 僕は幸せだよ…。」

ぼやける視界に男女の笑顔。

「こっかまた会おう。」

父さんの声がした。

そして…夢のよひに父さんと母さんは消えていった。

カラの方を向くと、カラは父さんと母さんが溶けていった空を見上げていた。

目は真っ赤だった。

しかしその瞳に…決心をしたよつな…強さがあった。

「ハラ~」

セツヒト、ハラセトを向いた。

「もう…ハラじゃない…。私は…望月彩子…タダの高校生。」

笑顔で望月彩子は顔をあげた。

なんだかそれが愛しくて望月彩子を優しく抱き締めた。

「…僕は…君が好きだ。」

「ララであり、望月彩子である君を…」

「愛してる。」

僕の口からその言葉が出る前に…僕の腕の中にはいる望月彩子が言った。

「涼…愛してる。」

その一言を貴重に扱いながら言った。

僕等は初めてキスをした。

僕にとっては初めての恋の味。

唇を離すと、望月彩子は俯いた。

僕の服を掌でギュッと握んで…

「だから……」

掌の力が一層強まっていく。

「愛してるから……」

「さよなら。」

あまりに急な言葉に僕は望月彩子を離して、顔を覗きこんだ。

笑つてた。

彼女は笑っていた。

涙を飲み込んで…

「…何…言ってんだよ…ずっと…一緒だら…」

彼女は僕に背を向けていた。

「やつぱルナ様は素晴らしいわ。この時まで待ってくれた…。  
ありがとうございます…。」

空を見上げて彼女は言った。

「なんでこいつがまつんだー…？」

彼女の背中に叫んだ。

「好きだから。」

そう言って僕の方を向く。

「涼……」いつの食べ物を食べちゃいけないのは……なんで分かる  
「…？」

笑顔で言つ彩子は苦しそうだった。

僕は黙つて首を横に振つた。

「ここちに……思い入れをしないため……。思い入れしないで人を幸せにしてあげるってのも変な話なんだけどね。」

「幸福の支配人の仕事をする限り……何も愛してはいけないの。隠していれば……大丈夫だけど……私は……あなたへの想いを隠せなかつた。」

「

彩子の目からは……押さえ切れずに溢れた涙がでてきた。

「好き……それを涼に言える幸せが私にある。」

そんなの……僕の幸せなんかじゃない……。

「どうなるんだ……」

ルールを破った彼女は……

「行くべき場所へ」

彩子の体が透け始めた。

少し顔を出し始めた太陽が彩子を透けて僕に触れる。

「バイバイ。涼、愛してる。」

僕は彩子を抱き締めた。

「行かせたくないつ……ずっと隣にいてくれ……。」

僕の涙が彼女の涙と混じり合ひ。

「大丈夫……。いつも……涼の側にいる。涼が悲しい時は……一緒に泣いてあげる……。」

「涼が嬉しい時は……枯れる程の声を出して喜んであげる。」

「田代は見えなくても……いつも涼の中にいる……。なんて……ちよつと気取りすぎかな？」

彩子は涙声で無理をしておどけてみせた。

僕は口を閉じて彼女にキスをした。

唇でしか語れない愛を捧げるために…。

抱き締めていた者の感覚が消えた。

僕は口を閉じたまま必要のなくなった腕を下ろした。

次に目を開いた時は、僕は彼女のいない世界にいる。

でも……僕の中に彼女はちゃんといる。

それでも……目を開ける事は恐ろしい。

彼女の笑顔はそこにもう無い。

## Hピローグ…ある幸福な一人の話

そうだ…あれは1年前。

僕はなんとかあの日田を開けた。

太陽の光にこじあけられて。

やつぱりそこに彼女はいなかつた。

僕の中にいた。

今も僕の中で一緒にいてくれるんだ。

嬉しい時に一緒に笑い、

悲しい時に一緒に涙を流し、

一人で一緒に…。

ずっとずっと…。

「好きだよ。」

他の誰でもない…望月彩子へ…。

君の涙は僕を恐ろしい程悲しくさせたけれど…その分の幸せをもうつた。

出会った事。

初めてキスをした事。

両親に会わせてくれた事。

好きと言つてくれた事。

僕の中は幸福で溢れて、でもまだ何かを求める。

常に何かを求め続ける僕達は、それに劣る程の幸せを食べて取りあえず保っている。

それが一番の状態。

それもできない人は、きっと幸福の支配人がやつてくる。

愛してはいけない人がやつてくる。

僕が彼女を抱き締めなければ、彼女は今も『ララ』だった。

僕が彼女を愛さなければ彼女はまだここにいた。

それでも彼女を愛したかった。

今までの恋とは違った感覚。

本当の恋だった。

本当の初恋だった。

また…会えたらしいな。

君の行つた場所へ。

どのくらいかかるかはわからないけれど…

その時に、精一杯愛し合おう。

君は今どんな顔で笑つて、僕を見てる？

そして…幸せですか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6176a/>

---

ある幸福な二人の話

2011年1月9日02時26分発行